

「福祉」の解釈を探る  
— 園芸福祉と園芸療法との関係をよりよく理解するために —

松尾英輔

東京農業大学農学部バイオセラピー学科

Survey of Concepts of Japanese Term 'Fukushi' ('Happiness' or 'Well-being'),  
for Better Understanding the Relationship between 'Engei-Fukushi'  
( 'Horticultural Well-being' ) and 'Engei-Ryoho' ( 'Horticultural Therapy' )

Eisuke MATSUO

Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture

Summary

This study was designed to compare the general concept and understanding of the Japanese people of the meaning of the term 'Fukushi' as revealed by a questionnaire survey, with the definitions of the term found in Japanese dictionaries. The aim of the study was to use the information obtained to develop a better understanding of the meaning and relationships between 'Engei-Fukushi' ('Horticultural Well-being') and 'Engei-Ryoho' ('Horticultural Therapy'). The survey showed that to citizens and students, the term Fukushi conjures up the meaning of: "to help and / or support the socially disadvantaged, such as children, the poor, elderly, disabled, diseased, etc.". However, a comparison of the dictionary definitions of the terms 'Fukushi' and 'Shakai-Fukushi (social welfare) clearly shows that the fundamental or original meaning of 'Fukushi' is 'happiness', 'well-being' or 'welfare' for everyone (not only the disadvantaged). The prevalent current Japanese image of Fukushi has developed because of the promotion of the national social welfare policy after the World War II, which has resulted in the idea that 'Fukushi' involves welfare by institutional organizations. Thus a confusion has arisen between the concepts of Engei-Fukushi (which really means horticultural well-being for all people) and Engei-Ryoho (horticultural therapy for people with a therapeutic necessity, where the involvement of helping professionals is necessary). In order to correct this confusion, it is necessary to educate (or re-educate) our community with respect to the difference in proper meanings between 'Fukushi' and 'Shakai-fukushi'.

**Key words:** Horticultural well-being, horticultural therapy, image on Fukushi, social welfare,

socially disadvantaged

園芸福祉, 園芸療法, 福祉のイメージ, 社会福祉, 社会的弱者

はじめに

農業福祉 (北海道立留寿都高等学校, 1994), 園芸福祉 (松尾, 1998a, b), 動物福祉 (松尾ら, 2004), 家畜福祉 (朝日新聞, 2007a) など, 農耕や動植物の領域でも福祉が論議されるようになってきた。とくに園芸福祉については, 高齢者の健康対策やまちづくり政策などともあいまって, 2002年以降, 地方自治体や市民の間にいちじるしく関心が高まってきた (松尾, 2004)。たとえば, 日本園芸福祉普及協会が認定する初級園芸福祉士の

受験者・登録者は急増し, 2005年には登録者が1,200名 (日本園芸福祉普及協会, 2005b), 2007年には3,000名近くになっている (日本園芸福祉普及協会, 2007)。

このように園芸福祉に関心をもつ市民は福祉をどのように認識しているのだろうか。園芸福祉に関係する集いで, まず抱いた疑問である。そこで, 園芸福祉や園芸療法に関する講演会などで, 「福祉」という言葉から何を連想するかについて, 参加者を対象にアンケート調査を行ったところ, 「介護」「老人」「老人ホーム」「ボランティア」「バリアフリー」などの回答がきわめて多かった (未発表)。

いっぽう, 園芸福祉士の活動に関するシンポジウムや

2007年8月7日 受付. 2008年3月1日 受理.

事例報告会での発表をみると、福祉施設や病院で園芸を行った活動報告が、ほぼ半数（NPO日本園芸福祉普及協会，2003）あるいはそれ以上（NPO日本園芸福祉普及協会，2005a）とかなり多い。

本来「福祉」は、しあわせ、さいわい・幸福を意味する言葉であるところから、園芸を通してすべての市民の幸福を増進するというねらいで「園芸福祉」という言葉が提唱された（松尾，1998a, b）。そして、園芸療法は療法的かかわりを必要とする人々の園芸福祉を実現する活動であると位置づけられ（松尾，1998a, b；2004；2005），園芸福祉士の活動と園芸療法士のそれとはいちじるしく違うことが示されてきた（松尾，2004；2005）。しかし、前述の事実は、療法的かかわりを要する人に特化した園芸療法とそれを包括する園芸福祉との関係がよく理解されず、園芸福祉と園芸療法とが混同されていることを示している。

したがって、園芸福祉と園芸療法との関係の正しい理解を促し、それらを普及していくには、まず市民が福祉をどのように理解しているかを把握するとともに、福祉本来の意味と現在の使われ方を理解し啓発することが欠かせない。

このような観点から本稿は、「福祉」についてアンケートを通して市民のイメージを把握するとともに、時代の化石ともいべき辞書類における「福祉」の記載に基づいてその解釈の変遷をたどりながら、園芸福祉は「すべての市民」を対象とした概念であり、園芸療法は「療法的かかわりの必要な市民」に特化した福祉活動であることを、理解してもらうことをねらいとするものである。

## 調査方法

### 1. アンケートを通してみる福祉について市民が抱くイメージ

まず、園芸福祉や園芸療法に関心をもつ市民が、福祉をどのように解釈しているかを探るために、2001年から2007年にかけて、園芸、植物、園芸療法ならびに園芸福祉に関係する大学の授業や講演の機会に、参加者の協力を得て、「福祉」から連想する言葉を三つずつ記述するように依頼し（記述時間は約3分）、その結果をまとめて解析した。

回答者539名の内訳は、社会人250名（男122，女128）、学生289名（男176，女113）であった。調査した地域ごとに回答者をみると、九州298名、近畿30名、中部77名、関東134名であった。

言葉の整理にあたっては、きわめて類似した言葉であっても、微妙にニュアンスが異なる言葉はそれぞれ別の言葉として数えた。たとえば、「祖父」と「おじいさん」、「お年寄り」と「年寄り」などがそうである。しかし、カタカナ書き、平仮名書き、漢字書き、たとえ

ば、「カイジョ」「かいじょ」「介助」などは同じ言葉とみなし、1語（それぞれ記述1であれば、述べ語数3とする）扱いとした。また、翻訳表現が異なる言葉、たとえば、「ノーマリゼーション」と「ノーマライゼーション」などは同じ言葉とみて1語（延べ語数2）として取り扱った。

### 2. 辞書類にみる福祉の内容

辞書類の言葉は使用頻度や重要度、定着度合いで選定されるし、辞書によって表現や意味が違う（朝日新聞，2007b；中村，2007）。また、改訂によって表現や説明が変わることがある。実際、広辞苑（新村）の「福祉」を例にとっても、第一版（1967）「さいわい。幸福。ふくち」、第二版（1973）「幸福。公的扶助による生活の安定、充足。（後略）」、第三版（1983）「幸福。公的扶助やサービスによる生活の安定、充足。（後略）」というように、記載内容は変化している。その意味では、辞書は言葉の変遷を示す化石ともいえる。したがって、新旧の辞書を通して言葉の解釈がどのように変わってきたかを追跡することができる。

そこで本調査では、「福祉」の解釈に影響するとも考えられ、子どもの頃から身近な存在である国語辞典・漢和辞典類を取り上げて、福祉の記載内容を探った。開架中の辞書類だけでなく、開架されている辞書類も対象とした。すなわち、開架資料を主に大学図書館（鹿児島大学、宮崎大学、佐賀大学、九州大学箱崎・六本松、福岡教育大学、筑紫女学園大学、兵庫県立大学淡路景観園芸学校、恵泉女学園大学、東京農業大学世田谷・厚木、明治大学生田、東邦大学習志野）と公立図書館（鹿児島県、鹿児島市、枕崎市、指宿市、宮崎県、宮崎市、熊本県、熊本市熊本・富合、宇土市、宇城市松橋、玉名市、荒尾市、長洲町、南関町、佐賀県、佐賀市、鳥栖市、基山町、長崎県、長崎市、大村市、諫早市、福岡県、福岡市、久留米市、小郡市、大野城市、春日市、八女市、筑後市、大牟田市、柳川市、みやま市、朝倉市、筑紫野市、太宰府市、北九州市、宇美町、粕屋町、篠栗町、筑前町夜須・三輪、広島県、広島市、兵庫県、明石市、神戸市中央・三宮、淡路市津名・東浦、西宮市、尼崎市、大阪府中之島、高槻市、京都府、京都市南、和歌山県白浜町、新宮市、三重県、津市、松阪市、大津市、彦根市、岐阜県、岐阜市岐阜駅、大垣市、中津川市、愛知県、名古屋市、豊橋市、静岡県、掛川市、袋井市、沼津市、三島市、熱海市、神奈川県、横浜市、川崎市中央・多摩、小田原市、平塚市、茅ヶ崎市、鎌倉市、逗子市、秦野市、伊勢原市、厚木市、海老名市、相模原市相模大野、大和市、藤沢市、茅ヶ崎市、大磯町、町田市、東京都日比谷・中央、東京都世田谷区経堂、豊島区池袋、渋谷区中央、狛江市、千葉県、千葉市、習志野市藤崎、群馬県草津町、福島県郡山市、二本松市、秋田県仙北市角館）で、国会国立図書館、同国際子ども図書館では主に

閉架資料を調べた。

その結果、福祉が記載された資料として、東京農業大学学術情報センターを通してコピーを入手した分も含めて、国語辞典357点、漢和辞典172点、漢字辞典74点、その他日本語関係辞典類（類語辞典、用語・用例辞典、実用辞典など）38点、あわせて641点を得た。出版年代別にその資料数を示すと、1903年から1940年代まで50点、1950年代75点、1960年代83点、1970年代77点、1980年代145点、1990年代128点、2000年代83点であった。これらの資料について、福祉の記載内容を調べ、その対象者と内容を分析した。

なお、奥付の書名が同じでも出版社が違う場合や同じ書名で同じ出版社から発行されている場合でも著者が違う場合や版型が違う場合（改訂版、新版、机上版など）には別資料とみなした。また、初版、二版、三版など版を重ねた場合に福祉の対象者が付け加えられている例がみられる。それらについては、その変更版を特定し、前版と変更版とは異なる資料として取り扱った。

## 結果と考察

### 1. 「福祉」から連想する言葉

本稿では「福祉」から連想する言葉を、KJ法（川喜田、1972）を援用してまとめ、市民がもっている福祉のイメージを探った。なお、さまざまな属性、たとえば、性別、年齢、職業などによって、そのイメージが違っている可能性はあるが、それ自体が福祉の全体像をとらえるほど大きな課題である。本稿のねらいは、園芸福祉や園芸療法の理解を深めるために一般市民が福祉をどのように解釈しているかを探ることなので、属性によるイメージ・解釈の違いについての検討はさておき、まず、全体としての市民がもっているイメージをつかむことにした。

回答者539人が「福祉」から連想して記述した言葉は403語、延べ語数（記述されたすべての語数）は1,516語であった。これらのうち、記述頻度が高かった10語をみる（第1図）と、介護、ボランティア、老人、高齢者、障害者、老人ホームなどが上位を占めた。

これらの言葉と第1表に示した具体例から浮かび上がる福祉のイメージは、「『老人ホーム』など各種『施設』にいる『老人』・『高齢者』、『障害者』『病人』など社会的弱者に対する施設の『バリアフリー』化、『介護』、『思いやり』や『ボランティア』による『助け合い』など支援や救済策」であることがわかる。

類似する言葉をグループ化して表現した類語群別にみた語数と述べ語数（第1表）からみても、高齢者・老人群（52語、延べ362語）、介護・介助群（30語、延べ224語）、ボランティア群（16語、延べ155語）、弱者・いたわり群（36語、延べ128語）などが、語数では33%、述べ語数では57%を占める。これらと福祉政策群、子ども

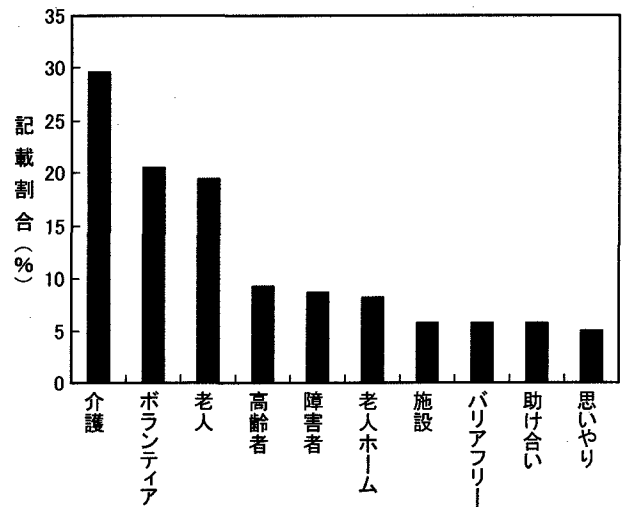


Fig.1. Top 10 words called to mind among 539 respondents for three words on the term 'Fukushi'.

第1図. 福祉から連想された言葉のうち上位から10語 (N=539).

群、経済群までを含めた社会的弱者の居場所や彼らとのかかわり方をあわせると255語、述べ1,197語となり、セラピー群（13語、述べ31語）、社会・コミュニティ群（33語、延べ85語）とその他（102語、延べ203語）とをあわせたもの（148語、述べ319語）と比べて、語数では1.7倍、延べ語数ではほぼ3.8倍となっている。

以上のように、記述された言葉には、一般市民にもあてはまるものがないわけではないが、それらの記述頻度は低かったのに対して、高齢者・老人、さらには子ども、障害者というような社会的弱者、彼らの状態や暮らしている場所、そして、介護・介助や思いやり、さらには助け合いなど彼らへの対応などは頻度も高く、その数も多かった。簡単にいえば、福祉とは「社会的弱者の支援・救済」というイメージでとらえられていることがうかがえる。

### 2. 辞典類に記載された福祉の内容

「福」も「祉」もさいわいを意味する言葉であることは多くの国語辞典、漢和辞典に記載されている（文献省略）。このことから、基本的には「幸福」、「幸い」、「しあわせ」、あるいはこれらの類似語である「幸運」、「福利」、「福さ」「ふくち」などの字義が辞書に記載されることになる。

実際、「福祉」の記載があった調査資料641点のうちほとんどが上記の言葉の一つあるいは複数個記載されていて、上記のどの言葉をも記載していなかった資料はわずか17点にすぎなかった。上記の言葉がどれくらいの頻度で記載されているかをみると、「幸福（こうふく）」（73%）、「さいわい（幸い、さいはひ）」（51%）、「しあわせ（幸せ、仕合わせ）」（38%）の三つが多く、「幸運・福利・福さ・ふくち」の記載は4%とごくわずかであった（第2図）。

とくに1955年までの資料には、上記以外の言葉はほと

Table 1. Words called to mind among 539 respondents asked for three words on the term 'Fukushi'.

第1表. 「福祉」から連想する言葉の類語群と具体的な言葉.

類語群名 <sup>2</sup>	具体的な言葉
高齢者・老人 語数 <sup>3</sup> 11.3% 延べ語数 <sup>4</sup> 23.9%	老人, 高齢者, お年寄り, 年寄り, 年配の人, 爺さん, おじいさん, じいちゃん, おじいちゃん, おばあさん, 年配の人, 高齢者, 78歳, いずれ私も, もうすぐ私も;年を取る, 老い, 老齡, 高齡, 高齡化, 高齡化社会, 老後;施設, ホーム, 老人ホーム, 老人施設, 老人福祉施設, 養老施設, 高齢者センター, きれい, きれいな施設, グループホーム;いなか, 孤独, 年金, 高齢者ケア, 重大問題, 生涯現役, シルバーシート, 尊厳, 利用者, いきがい, 道路に花植え, あやとり, 日々の充実, 長生き, 母の生活, やわらかい食事, 老人介護; ヘルパー, ヘルパーさん, ホームヘルパー
介助・介護 語数 7.4% 延べ語数 14.8%	介護士, 介護福祉士, 介助ボランティア, ヘルパー, ヘルパーさん, 支援者, ケアマネージャー;ケアハウス, ケアセンター;介護, ケア, デイケア, 心のケア, 在宅介護, 介助, 世話, ヘルプ, サービス, デイサービス, 心からのサービス;人手不足, 重労働, 体力, きつい, つらい, 大変, 介護疲れ, 疲れる, 苦勞;介護保険
障害・医療 語数 9.7% 述べ語数 11.9%	障害者, 身体障害者, 心身障害者, 精神障害者, 病人;医療, 病院, 医療機関;病氣, 心身の不都合, 不自由, 障害, 精神, 知的障害, 身体不自由, 心身の不都合, ぼけ, ハンディキャップ;医療福祉, 障害者援助, 医療, 治療, 薬, 看護, リハビリ, ぼけ防止, メンタルサポート, 支援;ノーマライ(リ)ゼーション, 障害者福祉, バリアフリー, 身障者保険, ノユニバーサルデザイン, ノンステップバス, 点字, 盲導犬, 白, 信号の音, 車椅子
ボランティア 語数 4.0% 延べ語数 10.2%	ボランティア;やさしさ, やさしい, 人間愛, ヒューマニティ;募金, 無償, 無料, 奉仕, 心の支え, 人間的, 人に役立つ, 人のため, 役立ちたい, ボランティア活動, 笑顔
弱者・いたわり 語数 8.9% 延べ語数 8.4%	困っている人, 弱い, 弱い人, 弱者, 恵まれない人, 社会的弱者;受ける立場, 救うもの, 隔離, 自立, なるべく自立, 親切, 気遣い, 共に歩む, いたわり, 思いやり, 思いやりの心, 気持ち;自立の助け, 助け, 手助け, 手伝い, サポート, フォロー, 人助け, 助け合い, 助ける, 援助, 救助, 補助, 扶助, 相互扶助, 公的扶助;施す, 弱者救済, 救済
福祉政策 語数 9.9% 延べ語数 4.7%	北欧, スウェーデン, 福祉国家, 国, 国家, 国の対応, 福祉制度, 制度, 政策, 政治, 行政, 厚生, 厚生労働省, 市役所, 公, 福祉社会;福祉施設, ふれあいセンター, 福祉センター, 福祉会館;福祉活動, 環境整備, 福利厚生, 国民, 国民が受ける, 市民福祉, 人権, 人権擁護;やすらぎ, 豊かさ, 豊かな心, ゆとり, よい環境, 世の中, 余裕の世界;園芸福祉, 福祉園芸, 福祉栽培;福祉器具, 福祉車両
子ども 語数 4.5% 延べ語数 2.6%	子ども, 児童, 幼児, 園児, ○○の息子, 養護施設, 保育園, 学校, 食育, 教育, 保護, 保育, 学ぶ親の責任, 児童手当, おねだり, 児童福祉, 児童福祉法
経済 語数 6.0% 延べ語数 2.4%	保険, 貧困, 金, お金, 金額, 金がかかりそう, 金がかかる, 必要, 大切, 大切なもの, 保険料負担, デフレ;暮らし, 生活, 生活しやすく, 生活保護, 生活, 安定サービス, 生活しにくい, 日常生活, 生活の質, QOL, 自分の生活, 生活支援
療法・セラピー 語数 3.2% 延べ語数 2.0%	園芸, 園芸療法, 園芸セラピー, 森林療法, アロマセラピー;動物, 動物療法, アニマルセラピー;ドルフィンセラピー;ストレス, 癒し, 癒す, 癒し系
社会・コミュニティ 語数 8.2% 延べ語数 5.6%	社会, 協力, 社会福祉, 社会保障, 社会制度, 社会保険料, 社会体制, よい社会, コミュニティ, つながり, 人とのつながり, 地域とのつながり, 交流, 語らい, ふれあい, センター, 公園, 花壇, 社会園芸, 社会の連帯, 社会奉仕, みんな一緒に, 町をきれいに, 手を取り合う, 地方, 地域づくり, エコマネー, 社会的, 地域社会, 地域交流, 社会生活, 社会問題, 明日の社会
その他 語数 25.3% 延べ語数 13.2%	人, 人間, すべての人, みんな;安心, 安定, 温かさ, 愛, 愛情, 健康, 幸せ, 幸福, 心, 心のゆとり, 心の平等, 心の豊かさ, やりがい, よりよい, 楽しく, 楽しさ, 生きる, 充実, 充足, 生き方, 生きる手助け, いいこと, 与えられる, いただく, 一方的な, 一緒に, 1リットルの水, オアシス, おぎなう, おぎない, お花教室, 恩恵, 階段, かかわり, 活動, 環境, 感謝, 希望, 義務, 共生, 協生, 協調, 共通, 共有, グローバルデザイン, 空想, 久留米, 注目, 公園設営, 公共, 行動, 心がける, 事柄, 今後の世界, 支えあう, 差別, 資格, 時間, 事業, 自己実現, 自己満足, 社交, 周囲の環境, 集団生活, 将来, 将来, 食事, 市立, 深刻化, 人生の充実, 人道, スイス, 素晴らしい, 責任, 設備, 相談, 対話, ドイツ, 道徳, 東横イン, ないがしろ, 和み, 日光, 発展, 人にやさしい, 平等, 文化, 平和, 法, 真心, まだまだ, 満足, みんないい, 面倒くさい, むずかしい, もっと充実を, 安い, 楽, 理解, 離別, 連休, 若手のがんばりを

<sup>2</sup>類語群名は具体的な言葉から発想するので, 人によって異なることがある. 読者の参考のために, 連想された言葉すべてを記載した.

<sup>3</sup>具体的な言葉(403語)数に対する類語群を構成する語数の割合(%).

<sup>4</sup>記述されたすべての言葉(1,516語)数に対する類語群に含まれる延べ語数の割合(%).

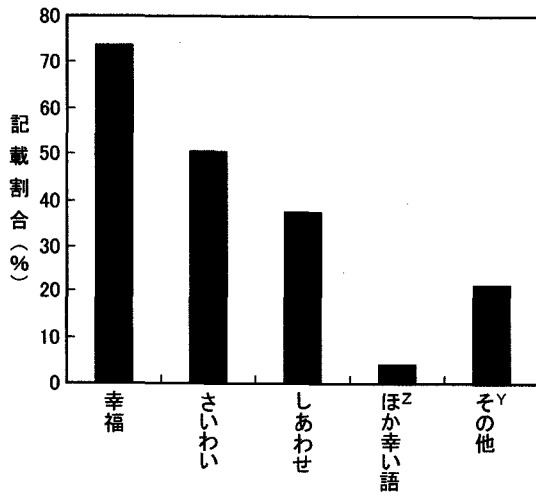


Fig. 2. Described words for Fukushi in Japanese dictionaries.

<sup>z</sup> Happiness related words except kofuku, saiwai and siawase.

<sup>y</sup> Other descriptions such as satisfaction, life, circumstance, etc.

第2図. 福祉の内容を表す言葉と記載割合 (%、N=641).

<sup>z</sup>幸福、さいわい、しあわせの類似語；幸運、福利、福さ、ふくち。

<sup>y</sup>上記以外の言葉。第2表参照。

んどなく、1956年にはじめて「人々が満足するようなよい状態」という形で、「福祉」の対象者と具体的な内容の解説が現れた(時枝, 1956)。

このような福祉の解説はその後「くらしのうえのしあわせ」(坂本, 1959), 「満足すべき生活環境」(見坊ら, 1972), 「社会の成員の生活の安定とそれにもなう満足感・・・」(金田一・池田, 1980), 「・・・不幸な人もみちたりたくらしができる環境」(藤堂, 1982), 「幸福。特に、社会の成員の物的、経済的または文化的欲求の充足をいう」(尚学図書, 1985), 「・・・人々が幸福で安定した暮らしができる環境。また、その実現のための施策。」(梅棹ら, 1989), 「・・・特に(公的扶助による)生活の安定や充足。また、人人の幸福で安定した生活を公的に達成しようとする事。」(西尾ら, 2000) などさまざまな表現で、誰(対象者)の福祉か、どのような場面(生活、暮らし、環境など)での福祉か、それをどういうやり方で(公的配慮、公的扶助など；手法)、どうする(充実、保護、保障など；目的)か、というような解説が付け加えられてくる(第2表)。そのような解説を記載する資料が増え、その表現が多彩になるのは、とくに1980年代からである(第3、4図)。

まず対象者については、人々(人びと)、多くの人(人々、人人)、たくさんの人、多数の人人、社会の(構)成員、社会の一員、社会に生きる人々、社会の人(人々)、社会全体、国民(全体)、世の中の人などがあり、これらを記載した資料は200点で、全資料のうち31%であった。そしてその数がいちじるしく増えるのは、1980年代からである(第3図)。

上記のなかには、「不幸な人」という表現が1982年(藤堂)にはじめてみかけられ、ほかにも「めぐまれない人びと」(林ら, 1984), 「老人・病人・児童・心身障害者など」(山田ら, 1995) など、いわゆる社会的弱者

Table 2. Explanation of Fukushi in dictionaries except happiness and its related words.

第2表. 辞書にみる福祉の内容(幸福とその同意語<sup>z</sup>を除く)を解説した言葉。

内容	説明する言葉
場面	暮らし、生活、健康、環境(社会環境、生活環境) 物的・経済的・文化的欲求、金銭や精神面
状態	よい、快い、満ち足りた(みちたりた)
手法	政策、施策・方策、公的に、公的配慮、公的扶助やサービス、国家によって
目的	整える、実現、達成、充足、充実、安定、保護、向上、保障

<sup>z</sup>しあわせ、さいわい、幸運、福利、ふくち。

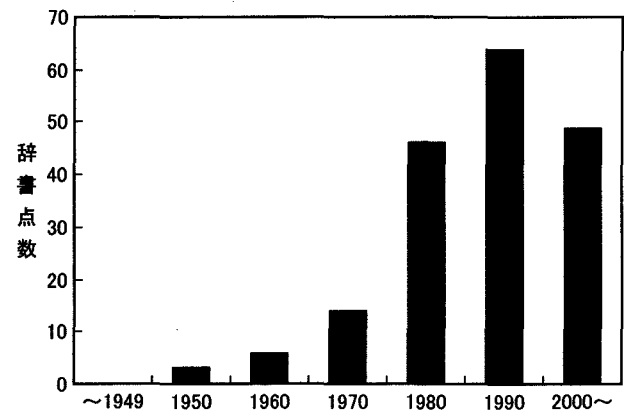


Fig. 3. Number<sup>z</sup> of dictionaries which described objectives of Fukushi.

<sup>z</sup> Data of every decade during 1950 to 1999.

第3図. 福祉の対象者を記載した辞書数<sup>z</sup>.

<sup>z</sup> 1950年から1999年までは10年単位。

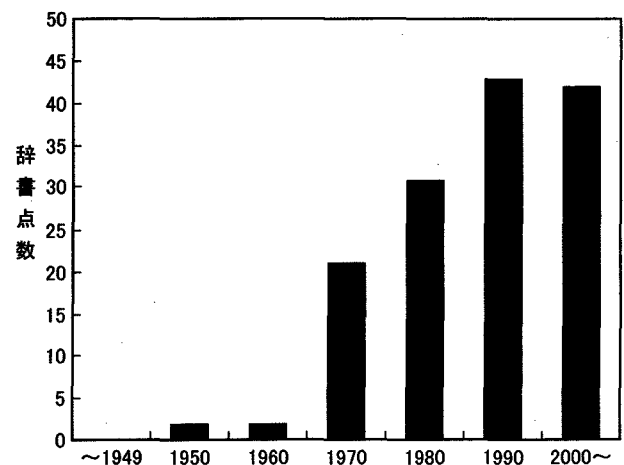


Fig. 4. Number<sup>z</sup> of dictionaries in which the explanation of Fukushi includes other meanings in addition to 'happiness'.

<sup>z</sup> Data of every decade during 1950 to 1999.

第4図. 幸福とその類似語以外の説明を記載した辞書数<sup>z</sup>.

<sup>z</sup> 1950年から1999年までは10年単位。

を表す言葉も出てきた。しかし、その数は1980年代5点、1990年代13点、2000年代8点、あわせて26点にすぎなかった。

福祉の場面、状態、手法、目的などの解説(第2表)を記載する資料は全体の約22%(第2図)、初出は1950

年代である（時枝，1956）が，資料数が増えるのは，対象者の記載と同じように1980年代である（第4図）。

以上のように1955年までは，単に字義を記載しただけのものが圧倒的に多くて，対象者の記載はなく，福祉の具体的説明もない。対象者，場面，手法や目的などの解説がはじめて記載されたのは1956年（時枝）であったが，解説が多様化してくるのは1980年代である（第4図）。

このように，1940年代までは福祉の対象者についての記載がなかったこと，さらに，記載されるようになった対象者も，「不幸な人」，「めぐまれない人々」というような限定された言葉を記した資料26点（重複を含む）に対して，市民全体を指す言葉を記した資料は190点といちじるしく多いという事実は，「福祉はすべての人の人権です」（一番ヶ瀬・宮崎，2004）という記述にも表現されるように，もともと福祉は対象者を限定するのではなく，すべての市民を対象とすることを示している。

### 3. 市民が抱く「社会的弱者の支援・救済」という「福祉」のイメージの成立

前述のように，「福祉」から市民が連想する言葉は，高齢者・老人，子ども，障害をもった人，貧しい人など，社会的弱者とその人々に対する施策，それらの人々が関係する施設，彼らとのかかわり方が圧倒的比重を占める。つまり，回答者のイメージとしては，福祉は万人のものではなく，社会的弱者に対する支援や救済にほかならない。

ところが，身近な存在である国語辞典・漢和辞典類にみる福祉は，本来は幸福・しあわせを意味し，その対象者は人々であり，対象者を社会的弱者に限定したものはなかった。実際，対象者を記載しない資料が1950年代までは圧倒的に多いし，記載した資料の多くも国民，社会の人々，人々などと記載している。これに対して，社会的弱者を記載した資料もあるがその数はきわめて少なく，「福祉は社会的弱者の支援・救済」というイメージを市民に植え付ける役割を，これらの資料が果たしたとは考えにくい。

では，このような，辞書類の意味とは異なる市民のイメージはどのように形成されてきたのであろうか。ここではまず福祉分野における福祉のとらえかたをみておきたい。

福祉という題名の付いた辞典・事典・用語集・ハンドブックなどを調べたところ，調査資料46点（主に国立国会図書館蔵書）のうち，福祉についての記載があったのは12点と，あまり多くはなかった。そしてそれらの多くに共通していることは，1）はじめに幸福やしあわせなどの福祉の字義が述べられていること，2）生活の望ましい状態を表現していること，3）それらを目指す制度・政策としての社会福祉と同義に使われると指摘していること，4）社会的弱者に関係する言葉は出てこないことである。

このように，福祉一般をみた場合には社会的弱者に関

する言葉はほとんど出てこない。では，ほぼ同義に使われるという社会福祉の分野ではどうなのであろうか。

まず，広辞苑をみると，第一版（1967）には「社会福祉」の項目はなく，第二版（1973）に「国民の最低限度の生活を保障するため，貧困者の生活保護，公衆衛生，共同募金などの事業を組織的に行うこと。（後略）」という形で現れる。第三版（1983）以降には「国民の生存権を保障するため，貧困者や保護を必要とする児童・母子家庭・高齢者（1991年の第四版以降では高齢者）・身体障害者など社会的障害を持つ人びとに対する援護・育成・更生を図ろうとする公私の社会的努力を組織的に行うこと。」とある。

社会福祉に関する辞書類の多くが，統一された定義はない，あるいは，一義的には定義できない，とことわりながらも，社会福祉は「他者の生活困難に対する共同的援助行為」（秋元ら，2003）であり，社会的な働きかけを欠かせないものとしてとらえている。つまり，望ましい暮らしができない人に対して，社会的な支援をすることが社会福祉の基本理念であったことがうかがえる。

以上のような福祉と社会福祉との違いを，一番ヶ瀬・宮崎（2004）は，「『福祉』は一人ひとりが自分の暮らしむきを良くするという個人の努力であることに対して，『社会福祉』は個人の『福祉』に対する努力を社会方や社会的努力により実現するための方法である。」と定義する。そして，その望ましい暮らしができない対象者の範囲が児童から障害者，経済的困窮者，高齢者などと，徐々に拡大されてきていることを，前述の広辞苑の記載にも読み取ることができる。

いずれにしても，端的に言えば，「社会福祉は社会的弱者の支援・救済」とみなすことができるのであるが，どのような経緯でこれが福祉と同義に使われるようになってきたのであろうか。

古川（2001）によると，戦前も含めて，社会福祉という言葉が定着するまでは，慈善事業，感化救済事業や社会事業という名称でよばれていた。第二次世界大戦後「社会福祉」という形で福祉政策が推進されるにあたって，子ども，心身障害者，貧しい人々，高齢者，母子家庭などの福祉を推進する法律が制定された。たとえば，児童福祉法（1947），身体障害者福祉法（1949），生活保護法（1950），社会福祉事業法（1951），知的障害者福祉法（1960），老人福祉法（1963），母子及び寡婦福祉法（1964）などである。

これらの法律では，子どものような弱者や経済的あるいは心身の健康など何らかの意味で恵まれない市民や健全でない市民の福祉が政策の中心課題となっていて，そのなかでは，一般市民の福祉はほとんど注目されていない。その背景には，「社会福祉」を「国家扶助の適用を受けているもの，身体障害者，児童，その他援護育成を要する者が，自立してその能力を發揮できるよう，必要な生活指導，更生補導，その他の援護育成を行うこと

をいうのである」という社会保障制度審議会の規定（阿部，1993）が大きく関係しているものとみられる。

ともあれ、これら諸政策が国や地方自治体あるいは団体の事業として上記のようないわゆる弱者を対象として推進されたことは、福祉事務所（現在は社会福祉センター）や社会福祉法人によって展開された活動をみれば誰にも理解できる。

このような公的扶助あるいは公的配慮による社会保障制度の普及・浸透、すなわち、社会福祉政策が充実し、市民にも知られるようになるにつれて、市民は、個人の努力である福祉（一番ヶ瀬・宮崎，2004）を社会方策や社会的努力により実現する社会福祉（一番ヶ瀬・宮崎，2004）を同一視する、つまり同義にとらえるようになったとみることができよう。つまり、市民は社会福祉の当面の対象者であった経済的困窮者、児童、心身障害者、高齢者などを支援あるいは救済するのが福祉であると解釈するようになったと考えられる。

そして、1981年の「国際障害者年等を契機に障害のある人もない人もともに暮らす地域社会を作るというノーマライゼーションの考え方の普及は」（森山，1993）、見田ら（1988）が指摘するように、「社会のすべての成員が最低生活水準以上のより向上した生活を営むべき理念として、幸福、満足、最適性とほぼ同義に用いられるようになり」、「障害者のみならず、あらゆる福祉の分野に及んできた」（森山，1993）。すなわち、理念的には対象者も場面も拡大されてきたことがわかる。

これらが福祉に対する市民の関心を高め、これを反映する形で1980年代以降に解説付きの資料が増えてきた一因になっているものと考えられよう。

## おわりに

園芸福祉は「すべての人（心身になんらかのハンディキャップをもつ人だけでなく健常者をも含めて）を対象にして、園芸を通して、その福祉（医療、福祉、保健すべての分野）にかかわること」である（松尾，1998b）。園芸療法はそのなかで、「療法的支援を要する人々を対象として、彼らの福祉を推進する領域である」（松尾，2004；2005）。わかりやすくいえば、そのような対象者に対して、その心身の状態を把握し、治療、リハビリテーション、介護・ケアにとどまらず、介護予防、健康の維持・増進、さらに生活の質の向上をはかるために園芸を活用する行為（松尾，2004；2005）が園芸療法である。

このように、園芸療法は、園芸福祉という概念のなかに含まれるのであるが、療法を必要とする対象者に特化した活動・領域である。したがって、一般市民を対象とした活動・領域とはいちじるしく異なり、療法的に専門的な知識と技術、さらに責任を求められることを明確に理解したうえで取り組まなければならない（松尾，2004；2005）。

ところが、アンケートで明らかになったように、市民が福祉を社会福祉と同義、すなわち、「社会的弱者の支援・救済である」と解釈している場合には、園芸福祉は「園芸を通して弱者を支援・救済すること」と解釈されることになり、園芸福祉と園芸療法との関係は理解されず、園芸福祉と園芸療法とは同義になってしまう。つまり、園芸福祉活動のなかにおける園芸療法の特殊性・専門性が理解されていないことになる。このようなところから、療法的かかわりを要する人々を対象にした園芸福祉士の活動が多くなる（NPO日本園芸福祉普及協会，2003；2005b）のは当然であろう。

このような誤解あるいは混同をなくするためには、園芸を通してできる「すべての人の福祉」を目指すのが園芸福祉であり、そのなかで療法的かかわりを要する人々を対象とした園芸療法という専門分野があることを理解しなければならない。

とはいえ、市民が抱く「福祉とは社会的弱者の救済」という社会福祉との混同を是正することはそう簡単にはできることではあるまい。園芸療法を含んだ園芸福祉の更なる普及と発展をはかるには、福祉本来の意味を根気よく伝えつつ、社会福祉との混同を無くし、園芸福祉とは何か、そのなかで園芸療法はどのような位置づけになるかを明確に認識できるように啓発して行くべきであろう。

## 摘 要

園芸福祉と園芸療法との関係をよりよく理解するために、市民が福祉をどう解釈しているか、福祉本来の意味は何かを探った。市民がイメージする「福祉」は「社会的弱者の支援・救済」に集約できることがアンケートで示されたが、「福祉」本来の意味（字義）は、しあわせ、幸福であり、すべての人々を対象とするものである。このように、市民のイメージと意味に違いができたのは、第二次世界戦後に実施されたさまざまな社会福祉政策の推進に伴って「貧しい人」「恵まれない人」「病人」「児童」「老人」などいわゆる社会的弱者を対象とした支援・救済という社会福祉の考え方が普及し、社会福祉と福祉とが混同されてしまったからである。これでは、園芸を通してすべての市民の幸福を推進するという園芸福祉の概念を理解することはむずかしく、病人や障害者など療法的かかわりを必要とする人を対象とした園芸療法と同義にとられてしまう。園芸福祉と園芸療法との関係を理解するには、福祉と社会福祉との違いを、市民が明確に理解するように啓発してゆく必要がある。

## 謝 辞

本研究の一部はKKクリエイトによる研究助成によって行われたものである。また、「福祉」のイメージを調査するにあたって、多くの回答者のご協力を得、回答の

取りまとめにあたっては、森永恭子女史の協力を得た。  
ここに記して謝意を表する。

## 引用文献

- 阿部 實. 1993. 社会福祉の意義. pp.1-6. 新・保母養成講座編集委員会. 社会福祉 新・保母養成講座第1巻. 社会福祉法人・全国社会福祉協議会. 東京.
- 秋元美世・藤村正之・大島 巖・森本佳樹・柴野松次郎・山縣文治. 2003. 現代社会福祉辞典. 有斐閣. pp.192-193.
- 朝日新聞(朝刊). 2007a. 畜産改革. 6月22日.
- 朝日新聞(朝刊). 2007b. 広辞苑めっちゃ変身. 10月24日.
- 古川孝順. 2001. 社会福祉の意義と理論. pp.2-23. 『新版・社会福祉学習双書』編集委員会. 社会福祉概論. 社会福祉法人 全国社会福祉協議会. 東京.
- 林 四郎・野元亀久雄・南 不二男・国松 昭. 1984. 例解新国語辞典. 三省堂. 東京.
- 北海道立留寿都高等学校. 1994. 平成6年度 学校経営の概要(案内資料).
- 一番ヶ瀬康子・宮崎牧子. 2004. 社会福祉とは何か. pp.1-24. 一番ヶ瀬康子・古林霽映湖(編). 2004. 社会福祉概論. 誠信書房. 東京.
- 川喜田二郎. 1996. 発想法. 中公新書136. 中央公論社.
- 見坊豪紀・金田一京助・柴田 武・山田忠雄・金田一春彦. 1972. 新明解国語辞典. 三省堂. 東京.
- 金田一春彦・池田弥三郎. 1980. 学研国語大辞典. KK学習研究社. 東京.
- 松尾英輔. 1998a. 園芸福祉(学)の提唱. グリーン情報 19(1): 61.
- 松尾英輔. 1998b. 園芸療法を探る. グリーン情報. 名古屋市.
- 松尾英輔. 2004. 園芸療法士と園芸福祉士はどう違うか. 農業および園芸 79(6): 641-646.
- 松尾英輔. 2005. 園芸福祉はいまー誕生, 現状, そして, 展望. 園芸学研究 4(4): 373-378.
- 松尾英輔・林 良博・森 裕司・局 博一・宮田勝重・東 保之・深澤真悟・豊田正博・馬場三佳. 2004. 生物活用(高等学校農業科用教科書). 農文協. 東京.
- 見田宗助・栗原 彬・田中義久. 1988. 社会学辞典. 弘文堂. 東京.
- 森山幹夫. 1993. 社会福祉の法体系. pp.29-61. 新・保母養成講座編集委員会(編). 新・保母養成講座第1巻 社会福祉. 社会福祉法人全国社会福祉協議会. 東京.
- 中村真理子. 2007. 辞書の言葉どうやって選ぶの? 朝日新聞(朝刊). 10月31日.
- 西尾 実・岩淵悦太郎・水谷静夫. 2000. 岩波国語辞典. 岩波書店. 東京.
- NPO日本園芸福祉普及協会. 2003. 園芸福祉活動プログラム提案 102例.
- NPO日本園芸福祉普及協会. 2005a. 2004年度 初級園芸福祉士「活動事例発表会」.
- NPO日本園芸福祉普及協会. 2005b. 園芸福祉NOW No.12: 7.
- NPO日本園芸福祉普及協会. 2007. 園芸福祉NOW No.15: 12.
- 坂本一郎. 1959. 標準小学国語辞典. 教育出版社. 東京.
- 新村 出. 1967. 広辞苑 第一版, 第二版(1973), 第三版(1983), 第四版(1991). 岩波書店. 東京.
- 尚学図書(編). 1985. 現代国語例解辞典. 小学館. 東京.
- 藤堂明保. 1982. 常用新版例解漢字辞典. 小学館. 東京.
- 時枝誠記. 1956. 例解国語辞典. 中教出版. 東京.
- 梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明. 1989. 講談社カラー版日本語大辞典. 講談社. 東京.
- 山田俊雄・小林芳規・築島 裕・白藤禮幸. 1995. 新潮国語辞典. 新潮社. 東京.